

The Limit of “Words”: The Representation of Failed Representations in J. M. Coetzee’s *Foe*

「言葉」の限界：J. M. クッツェー『フォー』における誤った表象の表象

熊本県立大学 文学部

英語英米文学科 4年

1812053 佐藤優妃

Foe 『フォー』 (1986)

作者

J. M. クッツェー (J. M. Coetzee)

作品の特徴

『フォー』は、ダニエル・デフォーの作品である『ロビンソン・クルーソー』と『ロクサーナ』の要素を基に作られた第4章からなる寓話的な物語である。

あらすじ

スーザン・バートン (Susan Barton) はクルーソー (Cruso) と舌のないフライデイ (Friday) がいる島に漂流する。一年と少し経ったのち救助され、イングランドに帰るものの、途中の帰路でクルーソーは亡くなり、イングランドでフライデイと共にスーザンは二人で暮らすことになる。

スーザンは島での経験を物語にするためにフォー (Foe) に依頼をする。島での生活を思い出そうとするものの、フライデイに舌がないが故に、島での生活に関する重要なことをスーザンは彼から聞き出すことができない。フライデイから島での話を聞き出すために、最終的にスーザンはフライデイに文字の書き方を教えることになる。

最終章では、フライデイ以外の登場人物は死んでおり、謎の一人称の語りによって、フライデイの口が二度開けられる。

Introduction

Chapter 1

“fullness of human speech” と “silent place” の比較

言葉の機能不全と信頼のなさ → 誤った表象の表象

Chapter 2

誤った表象を含む物語について

→ その物語の読み手と表象されたものへの影響

Chapter 3

第四章に現れる謎の一人称の語り手

→ 架空の作者かつ読者 → 架空の作者と読者の二つの役割

Chapter 1: 言葉の機能不全と信頼のなさ

スーザンは、言葉（words）に対して、信頼を置いていた

例）フォーはフライデイにあったことが無いにもかかわらず、言葉を通して知ることができる

一方で、状況によっては、スーザンが思っている言葉の意味とは異なる意味で使用されていることに気づく

例）フライデイにアフリカ（Africa）という言葉教える時やスーザンとフライデイがジプシー（gypsies）と通りすがりのおじさんに言われた時

フライデイは「自由」(Freedom)という言葉を知らないのに、
どうやって「自由」になれるのか、という疑問をスーザンは
抱く

→解決策として、フォーが次のように述べる

“There is not need for us to know what freedom means, Susan. Freedom is a word like any word. It is a puff of air, seven letters on a slate. It is but the name we give to the desire you speak of, the desire to be free. What concerns us is the desire, not the name” (149).

自由 (Freedom) という言葉は、自由になりたいという願望 (desire) の名前である

つまり、

- ・その名前を知ることによって、自由になるということではない
- ・その言葉を使って伝えようとしていることは、人によって異なる

→言葉自体の意味ではなく、言葉で何を伝えようとしているのかを知ることが重要である

(言葉自体への信頼のなさ)

しかし、
フライデイにはこの解決策には当てはまらない

原因：

フライデイはスーザンとフォーとは異なる世界に属しているから

二つの世界

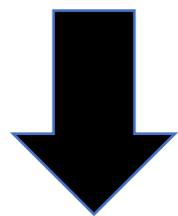
“fullness of human speech”

- 言葉 (words) によって支えられている文明化された世界
- 応答 (answering) する相手が不可欠

“silent place”

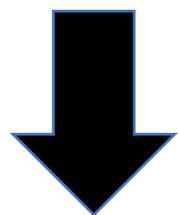
- 言葉や応答のない世界
(→思ったことを伝えられないし、答えることもできない)
- 身体(bodies)自体が記号(signs)になる場所
- フライデーの故郷 (the home of Friday)

スーザンはフライデイの考えていることを、言葉で知ろうとするが失敗



なぜ???

スーザンは“fullness of human speech”に、フライデイは“a silent place”に属している



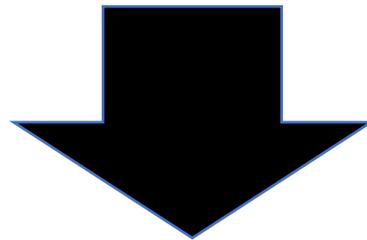
結果として

異なる世界に属していることで、スーザンはフライデイのことを理解することができない（**言葉の機能不全**）

Dominic Head (2009)によれば、

“Friday’s silence is a form of resistance to the discourse that defines him” (65).

→このフライデ이의silenceは、言葉で他の人によってフライデイが表象されることを不可能にしている



それゆえ

言葉でフライデイを表象するクルーソー、スーザンやフォーは、彼の誤った表象を生み出してしまっている

Chapter 1のまとめ

- ① 言葉は、状況や人によって表すものが異なる(**言葉の信頼のなさ**)
- ② 異なる世界 (言葉が存在する世界と、存在しない世界)に存在しているが故に、スーザンはフライデイの考えを**言葉で**理解できない (**言葉の機能不全**)
- ③ 言葉で表そうとする世界に属すスーザンたちが、言葉で表すことのできないフライデイを無理やり表象 (represent) することで、**誤ったフライデイの表象**が生まれる

Chapter 2: 誤った表象を含む物語の影響

フライデイは、スーザンたちが彼を表象することを止めることはできない

“Friday has no command of words and therefore no defence against being re-shaped day by day in conformity with the desires of others. I [Susan] say he is a cannibal and he becomes a cannibal; I say he is a laundryman and he becomes a laundryman” (121).

理由：フライデイは、言葉で自分のことを伝え、誰かに応答する術を持ち合わせていない

誤ったフライデいの表象を含む物語の例①

クルーソーから、フライデいに舌がない（真実ではなく、可能性に基づいた）理由を聞いてから、スーザンはフライデいを食人種とみなしてしまい、彼に申し訳なく思う

→真実に基づいていない話にもかかわらず、フライデいの舌に関する誤った表象を含む物語は、聞き手や読み手に先入観をもたせてしまっている

→この物語は、フライデいにネガティブな先入観を与えている

誤ったフライデイの表象を含む物語の例②

フライデイが島にいるときに、イカダに乗って、海の上で花びらや蕾を巻いていたことを、スーザンがフォーに伝える

その話をもとに、フォーは二つの話（クラーケンについてと、フライデイの仲間のために花を巻いている話）を作り出す

→真実に基づいていない二つの物語は、**読者に印象付ける効果や、よりフライデイをミステリアスに引き立てる効果を持つ可能性がある**
ある

誤ったフライデイの表象を含む物語の例③

スーザンとフライデイは港へ向かう途中、雨で全身が濡れてしまふ。服を乾かし、体を温めるために、フォーの家でフライデイが踊っていたようにダンスをする。

→この際に、なぜフライデイがダンスをしていたかを理解した、とスーザンは思う

→真実に基づいていない、スーザンの想像によるフライデイのダンスへの理解を読者が真実だと信じる可能性と彼のダンスへの誤った理解を促す可能性がある

Chapter 2 のまとめ

- ① フライデイしか、彼自身を表象できないにもかかわらず、他人による表象から抗う術を持たないがゆえに、フライデイは誤った表象が生み出されることを止めることはできない
- ② 真実に基づいていない、スーザン、クルーソーとフォーによる誤ったフライデイの表象含む物語は、信頼できないものである
- ③ 誤った表象を含む物語は、読者と表象されたものに影響を及ぼしてしまいう可能性がある

Chapter3:

第四章における一人称の語り手の役割

① 第四章における謎の一人称の語り手は誰なのか

→現実に生きている人物に相当する架空の作者であり、かつ読者である

② この語り手の二つの役割について

- ・ Chapter 1と2での議論は、フィクションの世界だけでなく現実の世界にも適用する可能性がある
- ・ 新しい視点を生み出すために、読み、書き直すことの可能性を示唆している

謎の一人称の語り手は誰なのか

Lubomír Doležeの主張

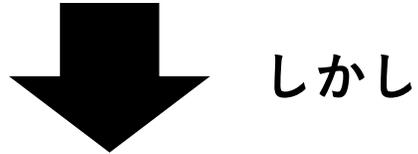
- ・ Chapter 4の謎の一人称の語り手は、**架空の作者 (fictional author)**
- ・ この架空の作者は、第四章で『フォー』の第一章でスーザンに書かれた初めの一文をもとに、**スーザンが書いたものを書き直している**

謎の一人称の語り手は誰なのか

Marco Caraccioloの主張

- ・ 第四章の謎の語り手は、**架空の読者 (fictional reader)**
- ・ 『フォー』の内容全体を把握するために、身体を使って実際に認知的に内容把握を行おうとしている
- ・ 『フォー』の第一章から三章までの内容と比較すると、第四章の内容はほとんど馴染みのある内容になっている
- ・ 辻褄が合わない内容は、不可解な人物を言及しないため

二人の批評家の意見には同意



Caraccioloの主張

「第一章から第三章の内容と第四章の辻褄が合わない」

→ 第四章の一人称の語り手が、架空の作者であり読者である可能性を主張する

フライデ이의傷の例

第四章でフォーの家へ二度目の訪問をした際に見られた
「フライデいの首周りの傷」

→第一章から第三章の内容と第四章の内容で、辻褄の合わない内容の一つ

第三章までに、フライデイに関する傷の描写は一度もない

1回目の訪問でも、傷があった可能性は低い

この傷は、第四章における謎の一人称の語り手が、**架空の読者として**『フォー』の第一章から第三章までを読み、**架空の作者として**第四章でフライデイの首回りの傷を書き、新たな物語を生み出したのではないか、という可能性を示唆している

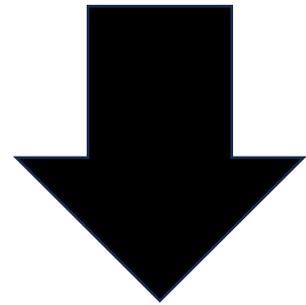
架空の作者であり読者の立ち位置

- ・ 第四章で、二度目のFoeの家への訪問の際、「ダニエル・デフォー（Daniel Defoe）、作者（Author）」と書かれたプレートが壁につけられているのを発見する

→ 一人称の語り手は、フォーの家がデフォーの家であることを知っている

- ・ 一人称の語り手は、スーザン、フォーやフライデイを知っているように第四章で振る舞う

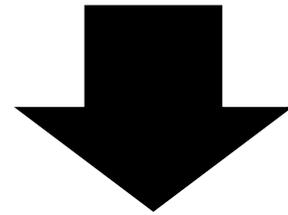
もし一人称の語り手がスーザンと同じ世界線の人物であるならば、スーザンがメインの語り手で書かれた物語を読んでいることはない



なぜなら

『フォー』の中で描かれている人物は、クッツェーによって書かれた物語を読むことはできないから

一人称の語り手は、スーザンやフォーとは異なる世界の人物であり、『フォー』の作者によって書かれた物語を読める人物である



なぜなら

この一人称の語り手は、『フォー』の第一章から三章までを読んだ可能性がある

この一人称の語り手は、現実に生きている人物に相当する架空の人物である可能性がある

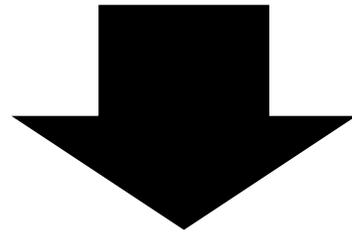
この設定は

- ・ 一人称の語り手は、現実の人物に相当する架空の人物として、クッツェーがデフォーの『ロビンソン・クルーソー』と『ロクサーナ』を書き直すことで、『フォー』を生み出したことを知っている可能性があること
- ・ 『フォー』の第一章から三章までを書き直すことが可能であること

を示唆することができる

一人称の語り手の役割①

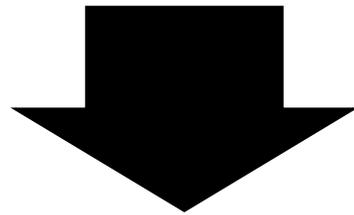
一人称の語り手が、現実の人物である可能性があること



Chapter 1と2における、言葉の信頼のなさと機能不全についての議論と、誤った表象を含む物語の影響は、フィクションの世界だけでなく、現実の世界にも適用できる内容であることを示唆する

一人称の語り手の役割②

- ・クッツェーがデフォーの『ロクサーナ』と『ロビンソン・クルーソー』を書くことで、『フォー』から新しい視点のスーザンやフライデイを書いた
- ・『フォー』の第一章から三章までの書き直すことで、第四章でフライデイの新たな視点を生み出した



書き直すことで、新しい視点を生み出すことを可能であることを示唆

Chapter 3 のまとめ

① 第四章における謎の一人称の語り手は誰なのか

→ 現実に生きている人物に相当する架空の作者であり、かつ読者である

② この語り手の二つの役割について

- ・ Chapter 1と2での議論は、フィクションの世界だけでなく現実の世界にも適用する可能性
- ・ 新しい視点を生み出すために、読み、書き直すことの可能性を示唆している

Conclusion

- 『フォー』は、舌のないフライデイを言葉で表象することができないのこと、そして誤った表象による影響が描かれている
- デフォーの『ロクサーナ』と『ロビンソン・クルーソー』の書き直しを『フォー』の第一章から三章で行うだけでなく、第四章で第一章から三章までの書き直しを行うことを通して、新しい視点を生み出すことの可能性を提示している
- 現実世界の『フォー』の読者に相当する架空の読者かつ作者として第四章の語り手を捉えることで『フォー』を通して語られていることは、フィクションの世界のことだけでなく、現実の世界にも通じることを作品を通して訴えている

Work Cited

- Boehmer, Elleke. "Transfiguring: Colonial Body into Postcolonial Narrative." *Novel: A Forum on Fiction*, vol. 26, no. 3, 1993, pp. 268–77. *JSTOR*. <https://doi.org/10.2307/1345836>. Accessed 14 Dec. 2023.
- Caracciolo, Marco. "J. M. Coetzee's *Foe* and the embodiment of meaning." *Journal of Modern Literature*, vol. 36, no. 1, 2012, pp. 90–103. <https://doi.org/10.2979/jmodelite.36.1.90>.
- Coetzee, J. M. *Foe*. Penguin Books, 2010.
- Doležel, Lubomír. *Heterocosmica: Fiction and Possible Worlds*. Baltimore (Md.): Johns Hopkins UP, 1998.
- Head, Dominic. *The Cambridge Introduction to J.M. Coetzee*, Cambridge University Press, Cambridge, 2009.
- Peterson, Christopher. "Chapter 2: Sovereign Silence: The Desire for Answering Speech." *Monkey Trouble: The Scandal of Posthumanism*, by Peterson, Fordham University Press, New York, 2018, pp. 43–63. <https://www.jstor.org/stable/j.ctt1xhr5xz.5>.